

福岡大学 医学会ニュース

No. 54

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

韓国啓明大学との姉妹校 協定調印が意味するもの

国際センター委員

坂田 則行

去る平成十八年十二月十八日、韓国大邱市にある啓明大学本部において福岡大学と啓明大学との間に姉妹校協定締結が調印された。

この調印に際して、十二月十七日には右崎宏医学部長、守山正樹公衆衛生学部長、坂田則行国際センター委員、おおよび深水一敏部長が韓国大邱市に赴き、啓明大学医学部の教職員と交流した。

一、啓明大学の概要

啓明大学は韓国第三の都市、大邱市にあり、医学、看護学部を含め二十の学部と十三の大学院を擁する私立総合大学である。約一、〇〇〇名の教職員が働き、在学学生は約二八、〇〇〇人である。うち医学部生は約五〇〇人(一学年定員八十八人)である。メインキャンパスは市郊外にあるが、医学部、看護学部、病院は市の中心部に位置している。医学部とメインキャンパスとは開

通したばかりの地下鉄で結ばれている。医学部の前身Dongsan医療院は、韓国で最古の洋式病院の一つであり、米国キリスト教宣教師により一八九九年に設立された。

二、これまでの経緯

二〇〇〇年度 守山正樹公衆衛生学部長が中心となって、福岡大学医学部三年生が啓明大学医学部四年生との間で医療や医学教育全般に関する意見交換し、八月には大邱市で交流した。

二〇〇一年度 福岡大学の社会医学系を中心とする三名の教員が大邱市を訪れ、啓明大学医学部の予防医学教室の実習に参加した。

二〇〇二、二〇〇三年度 福岡大公衆衛生学教室を中心に二名の教員が啓明大学医学部四年生に対して授業を行い、交流した。

二〇〇四年度 二〇〇五年二月に啓明大学医学部五年生四名が二週間、福大病院で福岡大学の学生と交流しながら消化器内科と小児科の臨床実習を行った。

二〇〇五年度 独立行政法人日本学生支援機構の支援を受け、二〇〇六年一月に啓明大学医学部五年生九名が教職員(のべ五名)と共に来福し、二週間の臨床実習をおこなった。

二〇〇六年度 二〇〇六年五月に福岡大学医学部六年生十名が教職員(のべ五名)と共に大邱市を訪れ、啓明大学医学部で

二〇〇七年一月には啓明大学医学部五年生五名が二週間、福大病院で福岡大学の学生と交流しながら内科を中心に七つの診療科で臨床実習を行った。

これまでの交流の経緯を年表式にまとめた。このように、両校の医学交流は、基礎医学部門から臨床実習までの交流へと進化し、さらに今回の姉妹校協定締結へと発展し、新たな段階に入った訳である。

三、これまでの成果

第一に、日本とよく似ていて、同時にやや異なる文化をもつ韓国の医療の現状に触れることで、日常診療から看護に至るまでの医療全般に関連して、ささやかな発見が積み重なり、学生の医師になるモチベーションが高まったことである。

第二には、医学英語の単語を一つ知っているだけで、自らの世界が確実に広がることを体感したこと。片言の英語を介して、韓国の学生と共に学ぶことで、「楽しい緊張感」や自らの能力を高めることに気づき、自分への信頼と行動力が高まったことである。この自信と経験は、福大生にとって国際化への第一ステップとして得たい貴重な経験になったことである。第二には、韓国医学生との礼儀、マナーに触れることで、福大生が医学を学ぶ過程での礼儀やマナーの大切さと素晴らしさに自ら気づいてくれたことである。さらに、われわれ教職員を含め、啓明大学の学部全体の対応に大変好感をもち、今後もこの事業を継続したいという機運が高まったことが、今回の姉妹校協定締結にも結びついているものと思われる。

四、今後の展望

医療、看護、福祉の分野は急速にグローバル化している。福岡大学としても、この交流の目的は、異なる民族、文化を背景とする医学部生同士が『医師になる』という明確な目的意識のもとで、互いの臨床教育や医療現場を共有し、医学、医療に対するグローバルな見方、考え方を学び、国際的感覚を身につけた医師を養成することである。さらに、ライフサイエンスや福祉をはじめとする専門分野での交流に発展させ、グローバルな見方、感性を有する様々な専門職を育成することである。



右から、呂博東啓明大学学務副総長、李鎮雨啓明大学総長、坂田教授、守山教授、深水医学部事務部長

看護学科新設にあたって

医学部看護学科

寺崎 明美

この度、長い道のりを経て、平成十九年四月一日付けで医学部看護学科が新設され、三月二十六日に看護学科棟竣工記念式典が予定されています。これも一重に学長や副学長、大学内外の関係者の皆様方、特に医学部長の岩崎先生をはじめとする医学部教授会や諸先生方のご支援、ご協力の賜物と感謝申し上げます。

十九年度の看護系大学は当大学を含めて一五八の大学設置となりました。

新たな看護学科のスタートにあたり、スタッフ一同緊張の日々を過ごしておりますが、紙面をお借りして

看護学科について、若干ご紹介申し上げます。なお、看護専門学校からの看護学科への経緯、設置構想の理念と目標につきましては、医学部同窓会誌(鳥帽子会)に報告させて頂きましたので、看護学科の準備状況とカリキュラムについて紹介させて頂きます。

一、学生受け入れの準備状況

四月のスタートに向けて入学選抜が開始されております。大学組織に組み込まれる最初の入学選抜であり、入試センターを始め、積極的な広報活動のもと、

十二月二十三日の推薦入試は、二十名の定員に一五八名の優秀な学生推薦の応募者がありました。

二月八日、十一日の一般入試につきましては、八十名の定員に七八名の応募者があり、初年度としては、まずまずの滑り出しを致しております。来年度は、福岡県内に看護系大学一、二校が設置予定と聞き及んでおります。県内十に及ぶ看護系大学の競争激化を促すために、学生や第三者による評価をより良いものに導く必要があり、将来を見据えた看護学科の理念・目標・特徴が生かせる教育

二、看護学科のカリキュラム

大学審議会の大学改革推進テーマである個性が輝く看護学科として、課題としての教育研究の高度化、高等教育の個性化、組織運営の活性化の方向性を探りながら、学生にとって魅力あるカリキュラムを、思考してまいりたいと考えています。

なかでも、高等教育の個性化は、九学部の総合大学の特徴を存分に生かした教育と、実社会のニーズに応えるための情報処理教育などが盛り込まれています。しかし、現代若者像に對峙した看護の専門性を考えますと「人間の尊厳や人間存在



新しく完成した「医学部看護学科棟」

を倫理・哲学する」人間形成の教養科目を、より学習効果を上げるため、四年次に位置づけるなど、今後のカリキュラム改訂等で検討を重ねたいと考えています。

専門基礎科目につきましては、出来るだけ多くの医学科の先生方に、授業への関わりにご協力頂くことにより、学生を通して看護学への造詣を深くして頂けるのではないかと期待致しております。

専門科目では看護は実践の科学であり、文科省が各大学に最も注目している「到達目標を掲げての学生の個別看護実践能力の育成」という課題に如何に取り組むかは難題であります。学

近年アジア圏を中心に文化系分野での交流が進められている。しかし、医学、医療分野の交流は未だ充分とは言えない。今回の啓明大学との姉妹校協定締結により、この専門分野での交流がさらに発展することが期待される。

この交流の目的は、異なる民族、文化を背景とする医学部生同士が『医師になる』という明確な目的意識のもとで、互いの臨床教育や医療現場を共有し、医学、医療に対するグローバルな見方、考え方を学び、国際的感覚を身につけた医師を養成することである。さらに、ライフサイエンスや福祉をはじめとする専門分野での交流に発展させ、グローバルな見方、感性を有する様々な専門職を育成することである。

育も含めて今後の課題と考えています。

いよいよ四月には歴史ある看護学科の第一回生が、春爛漫のなかロマンに胸膨らませて入学してまいります。その輝きがより切磋琢磨され「キラリと光る看護」に結びつく様な、教育環境作りを心がけたく思っております。何卒、医学科の諸先生方のご協力を切に願います。

新 風

平成18年10月1日付けで本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。

病理部教授

鍋島 一樹



早いもので前任地の宮崎医大より福岡大学病院へ赴任してこの一月で丁度四年四ヶ月が経ちました。昭和五十六年の宮崎医大卒業以来、米国留学期間を除いては南国宮崎での生活でしたので、赴任当初は青空の少ない冬の空と寒さに戸惑いましたが、もう随分と慣れました。

福大病院は臨床の先生方との交流のし易い風があり、感謝しています。脳腫瘍、肺癌、乳癌、乳腺画像、肝臓、皮膚病理のカンファレンスに声を掛けていただき参加しています。個々の症例の背景と共に臨床医の知りたいことを教えていただく貴重な場です。同時に病理からの要望をお伝えする場でもあります。着任早々に臨床の先生より戴いた「連

携はもろん大切ですが、お互いを評価する厳しさは持ち続けましょう」という言葉は大切にしています。医療の高度化、多様化に伴う対応も求められています。大学院生諸氏の仕事です。着任以来、菊池副学長、岩崎医学部長の温かなご指導のもと、諸先生、同僚諸氏、技師諸氏、大学院生諸氏の協力のおかげで病理部、教育、研究での仕事を進めていくことができました。この場をお借りしてこころより感謝申し上げます。初心に反ってさらに精進したいと存じますので、今後ともどうぞよろしくご指導お願い申し上げます。

の組織学的検討から、微小乳頭状パターンを示す癌のリンパ管侵襲の過程にも小集塊でのCMが関与していることがわかってきました。大学院生諸氏との仕事です。着任以来、菊池副学長、岩崎医学部長の温かなご指導のもと、諸先生、同僚諸氏、技師諸氏、大学院生諸氏の協力のおかげで病理部、教育、研究での仕事を進めていくことができました。この場をお借りしてこころより感謝申し上げます。初心に反ってさらに精進したいと存じますので、今後ともどうぞよろしくご指導お願い申し上げます。

平成十三年一月より島根医科大学環境保健医学講座、と様々な大学において衛生・公衆衛生領域における研究と教育に携わってまいりました。現在の主な研究テーマは診療報酬細則を用いた地域における保健事業の評価であります。平成十四年度より熊本県国保連合会の「医療データ分析による健康づくり事業検討会」の委員を拝命しており、ここ数年は九州が主な研究フィールドとなっております。診療報酬明細書は貴重な情報を有しておりますが、制度及び技術面での制約から全ての情報が有効に活用されているわけではありません。内閣府IT戦略本部のIT新改革戦略でも診療報酬明細書を取り上げられており、今後の発展が期待される分野であります。その他、循環器疾患のホート調査、乳幼児の事故予防対策、地域における健康施策策定などにも関わっております。

衛生・公衆衛生分野は長期間の追跡を必要とするコホート調査が主な研究方法であるなど、臨床及び基礎医学とは異なる特性を有しており、医学以外の専門家と接する領域も多く、社会医学とも呼ばれております。医療費適正化や医師確保対策など、社会医学に関連する問題がマスコミで取り上げられる頻度が高くなっていることや、近年の医師国家試験において社会医学領域の出題数が増加傾向にあることは、この分野の重要性を示すものと思われま

平成十八年十月一日付けで福岡大学医学部衛生学教室の助教を拝命いたしました。私は平成四年に岡山大学医学部を卒業後、岡山大学衛生学教室の大学院に進み、高齢者の死亡前医療費の決定要因に関して診療報酬明細書を分析することで学位を取得いたしました。その後、平成八年四月より自治医科大学公衆衛生学、

できるように努力していきたいと存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。………

産科婦人科学助教 江本 精

昭和五十九年福岡大学医学部産科婦人科学教室に入局し、同研修医、福岡通信病院、福大病院医員を経て、昭和六十三年から病理学の大学院で菊池昌弘教授、岩崎宏教授のご指導を受け、福大では初めて「婦人科病理学」を専攻とした研究・診断に携わりました。典型的な開業医の長男であった私にとつて、「医学」は常に受け身であり周囲から半ば強要される学問でしたが、学生時代から興味があった「腫瘍学」の門を自らくぐれたことはやと自分の人生が始まったような気がしました。研究テーマは謎の混合腫瘍と言われた子宮癌肉腫の細胞形態学で、がん細胞が肉腫細胞へ変化する事実を培養系でとらえることに成功し、この時に「がん幹細胞」という言葉を初めて意識しました。

大学院終了後、国立病院九州がんセンターで婦人科レジデントを一年間済ませて、産婦人科教室に助手で復帰しました。その後講師となり、急速に進歩する画像診断、とくに超音波カラードプラによる血流画像と病理組織学をつなぎ合わせる研究を進め、十年前から「血管新生」という近年の生物学

の大きなエポックに入り込んでいます。血管新生に対する興味から、平成十二年から二年間、福岡大学在外研究員として英国ケンブリッジ大学産婦人科学・病理学教室に留学し、その分子病理学的研究に携わりました。英語と米語の違い、さらに英国南東部のアクセントの強い方言に戸惑いつつ、家族と共にのんびりと暮らしたイギリスのカントリーライフは不便ながらもとても良い思い出になりました。二年目には留学先の教授推薦を受け、同

大学のセントエドモントズ大学院の客員研究員として英国の伝統的なカレッジライフを一年間体験しました。また、英国留学中に日本学術振興会の日米がん研究フェローシップ派遣研究員に採用され、三ヶ月間米国ハーバード大学医学部細胞生物理学と同マサチューセッツ総合病院外科病理学で研究と病理診断に携わることも出来ました。短期間ではあっても、家族をイギリスに残して単身で米国生活をおくることになるとは想定外でした。

帰国後は、ケンブリッジ大学での知人と立ち上げた明治大学理工学部先端医療技術創製研究所とのコラボレーションや解剖学立花教授との超音波治療の研究に力を入れ、血管新生阻害をベースにした新しいがんドラッグデリバリーシステムの構築に取り組み、平成十九年度の福岡大学総合研究チームIに採択されました。趣味は、'60-'80年代のロック・クラシック(とくに、THE BEATLESとWEST COAST SOUNDS)と加山雄三若大将シリーズ映画の鑑賞、そして世界各地の古く安くて美味しい店を探して食べ歩くことです。それが食都福岡に住んでいる理由の一つでもあり、今後とも趣味の方でも宜しく願ひ申し上げます。

教室紹介

精神医学

当教室の最も大きな特徴は、教授から医員までの医局員の平均年齢が約三十二歳という若い医局ということだ。

現在、外来では十名の医師が診察を行っており、年間新患者数は七〇〇〜八〇〇人、再来患者数は一日七十〜一二〇名です。疾患は、統合失調症、気分障害、不安障害が主体ですが、最近では小児うつ病、認知症を主とした老年期精神障害、もしくは性同一性障害も増加しています。また、身体科から数多くリエゾン依頼があり近年増加傾向にあります。外来の初診の約二十％はリエゾンです。平成十八年四月には麻酔科、内科、薬剤部、看護部と共同で緩和ケアチームを立ち上げ回診を行っています。

西別館には開放が四十二床、閉鎖が十八床、併せて六十床のベッドがあります。当病棟は比較的母亲的な環境をかし出してあり、良性的の退行とおもわれる場合はそれを妨げないという伝統があります。また臨床教育には重きをおいており、臨床経験三年目までのスタッフにはオーベンとコンサルテーションという二名の教育係がつき、週一回定期的に指導します。

一九七四年に、当デイケアは国内初の大学病院デイケアとして開設されました。他の精神科病院のデイケアに比べ通所者の平均年齢が若いというのが特徴としてあげられます。統合失調症を中心とした患者様がスタッフとともにSSTやスポーツ、社会復帰のためのセミナーやお弁当作りなどの職業訓練も行い、積極的な治療活動を行っています。

今年より、前期臨床研修必修化制度により当科にもすべての研修医がローテーションするようになりました。

当教室ではすべての研修医に対して十六時間以上のクルーズを行い、一人につき三人の上級医または指導医を割り当てるという手厚い研修制度を行っています。

教室の雰囲気は、比較的若い先生が多いために自由で活発な雰囲気、休み時間には笑い声が絶えません。まだまだ経験不足なところは否めませんが、教室を引っ張る若手の医師は、不安を感じながらも新たな取り組みをしていくことにやりがいを感じており、全員が一つにまとまってがんばっています。

(医局長 浦島 創)





成十四年度より本理学学部
化学科の李 相男先生と
small globular protein (SGP)
の深部悪性脳腫瘍への応用
を目指し実験を行っており
ます。また講師の大城真也
君を中心に、一緒にTNF-
 α による悪性脳腫瘍の免
疫治療を行い、成果を上げ
つつあります。

これからさらに新しい分
野を開拓し、なお一層精進
していきたいと思えます。
今後ともご指導、ご鞭撻の程
宜しくお願い申し上げます。

耳鼻咽喉科講師
末田 尚之



一九九四年福岡大学医学
部を卒業後、当時曾田教授学
部の主宰されていた福岡大学
耳鼻咽喉科学教室に入局致
しました。二年間の研修を
終えた後、九州がんセンタ
ーにて頭頸部外科一般を学
ぶ一方、研究面においては
神経耳科学を専攻し内耳障
害、特に耳鳴についての研
究を行い学位も取得するこ
とが出来ました。二〇〇一
年からの二年間はオースト
リア、西の州都パースに在
る西オーストラリア大学

一九九四年福岡大学医学部を卒業後、当時曾田教授の主宰されていた福岡大学耳鼻咽喉科学教室に入局致しました。二年間の研修を終えた後、九州がんセンターにて頭頸部外科一般を学ぶ一方、研究面においては神経耳科学を専攻し内耳障害、特に耳鳴についての研究を行い学位も取得することが出来ました。二〇〇一年からの二年間はオーストラリア、西の州都パースにある西オーストラリア大学



末田 尚之

き、主にモルモットを用いた内耳生理の研究を行いました。特に耳鳴の要因とも考えられる蝸牛有毛細胞—聴神経シナプスにおける自発放電の研究に従事出来、様々な知見を得られたことは幸運だったと思います。

また、オーストラリア大陸は日本の約二十倍の面積があるにも関わらず、人口は約一／七程度で非常にゆつたりした所です。中心部以外に高い建物はなく人々の気質も穏やかでとてもいい街です。郊外であれば日本とは比べ物にならない程格安な値段でフロントヤード、バックヤード付の一戸建てが手に入れます。定年された日本人の方の移住も比較的多く、私も「将来のリタイア後はパースで」と考えています。

臨床面においてはがんセンタ―での経験が大きく、手術手技だけでなく疾患に對する考え方も強く影響を受けたように思えます。耳鼻咽喉科というマイナーなイメージが強く、手術もあまり多くないような印象を持たれがちですが、實際は頭頸部という美容上も非常に目立つ部分を扱うが故、患者さんだけでなく我々医療者側も大変苦悩することが多くあります。

二〇〇六年度からは中川教授が着任され、医局内にも新しい風が吹きつつあります。魅力ある教室を作ります。発展させていくために自分が出ることを考え、日々努力していく所存ですのでどうぞ宜しくお願い致します。

次の方は、平成18年10月3日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

濱田 義浩 (病理学助手)

MK-1 expression in carcinoma of the ampulla of Vater as a predictor of improved prognosis after surgical resection

岩田 敦 (循環器科助手)

Lower level of low-density lipoprotein cholesterol by statin prevents progression of coronary restenosis after successful stenting in acute myocardial infarction

北島 研 (循環器科医員)

Persistent liver expression of murine apoA-1 using vectors based on adeno-associated viral vectors serotypes 5 and 1

松村 健 (学外者)

Effects of cyclic AMP on the function of the cardiac gap junction during hypoxia.

嶋津 剛典 (学外者)

A prospective study of the prevalence of gastroesophageal reflux disease and confounding factors.

鈴木 統久 (学外者)

Altered expression of alkaline phosphatase (ALP) in the liver of primary biliary cirrhosis (PBC) patients.

新井 鐘一 (学外者)

Preoperative Extracranial Carotid Artery Examination with Ultrasonography in Patients Undergoing Coronary Artery Bypass Grafting in Japan

岡本 嘉一 (学外者)

Multicystic uterine cervical lesions. Can magnetic resonance imaging differentiate benignancy from malignancy ?

筑紫病院外科

福岡大学筑紫病院は、一九八五年七月、福岡大学医学部の第二教育病院として福岡市の南に位置する筑紫野市俗明院に開設されました。いつの時代にも俗明院に変わったのかは定かではありませんが、元々、この地は続命院と称され、太宰府政庁の時代には、日本最古の療養所の所在地として史書に残されています。

開院後二十年を経て、筑紫地区（筑紫野市、春日市、大野城市、太宰府市）の中核病院として発展途上にあり、さらに医療圏

は福岡市近郊ばかりでなく、甘木、朝倉地区、日田市、佐賀市にまで及んでいます。

当病院は、大学病院といえども、臨床の最前線であり、豊富な症例から培われてきた臨床力を基盤に、プライマリークアから専門性の高い領域まで患者個々の疾病背景に見合った適切な医療の提供と、広い視野をもち、痛みのわかる臨床医の育成を一つの理念としています。

全病床数三四五床、うち内外科六十床。内容は消化器、外科を中心とし、呼吸器、乳腺があり、これに救急医療

患が含まれます。年間の入院症例は約九〇〇例、うち約五十%が悪性疾患です。施設としては中規模であるが、その利を生かして、各診療科の連携は密であり、無駄な時間をはぶいた迅速な横断的医療を可能にしています。当科は開院以来二〇〇五年に手術症例数は一万例を超え、年々症例数は増加しており二〇〇六年は七八二例（前年六六七例）でした。特色の一つとしては消化器疾患には消化器内科・放射線科との連携による症例に応じた治療を行うことです。特に炎症性腸疾

患の症例は国内有数であり、この分野での治療は国内トップレベルです。悪性疾患についてもぬかりなく、手術を中心に最高水準の集学的治療を行っています。また、当科設立当時から理念の一つとして緩和医療・終末期医療（終末期外科手術を含め）にも力を注いでいるのも大学病院としては珍しいのではないのでしょうか。さらに地域医療に重点をおいているため、当科の医局員は月に二、三回の救急当直が義務付けられ、主として内科・外科など区別なく救急疾患に対応するため、良性疾患や救急疾患の症例も多いのが特徴です。

以上よりまさに臨床の最前線で高度専門医療、地域医療、緩和・終末期医療と

全人的医療を行っておりま
す。したがって我々は非常
に多忙な毎日を送っていま
すが、ベッドサイド・手術
を中心に学生、研修医への
指導と外科専門医の育成に
日々、楽しく、励ましあい
精進しています。

もう一つの特色として当
科では、臓器・疾患別のチ
ーム分けはしておらず、幅
広く多様な病態を経験し治
療にあたることができま
す。

よって余裕をもって自分の
サブスペシャリティを決
めることができ、幅広い対
応力をもつ外科医になるこ
とを自負しています。

当科での臨床研修は厚生
労働省の定める到達目標に
基づき、高度専門医療に対
する学術的興味を持ちつつ、
プライマリーケアを大切に

した全人的な幅広い診療能力を身に付け、特に患者―医師関係、チーム医療に重点を置き、緩和医療、終末期医療の十分な体験をすることを目標にしています。

また卒後研修は卒後五年で日本外科学会専門医資格取得し、八年目以降で消化器外科学会専門医等、サブスペシャリティの取得を義務付けています。

最後になりましたが、開院以来、二十年間筑紫病院外科を牽引された有馬 純孝教授が二〇〇六年の春に退任されました。現在は一見喜太郎外科部長（消化器外科治療・炎症性腸疾患を中心に河原一雅助手（消化器癌外科治療・鏡視下手術）東大二郎助手（消化器癌外科治療・炎症性腸疾患）、紙科治療・炎症性腸疾患）、紙

谷孝則助手（消化器癌外科治療・救急医療）、関克典助手（消化器癌外科治療）、成富一哉助手（消化器癌外科治療）、犬東浩二助手（呼吸器外科治療）のスタッフと個性豊かな若い医員が一丸となり非常にチームワークの良い医局ができました。

今後、我々は筑紫病院、福大病院のみならず地域医療の発展に役に立つようこれまで以上に精進していきたいと思います。



「第9回福岡大学医学会賞」 論文募集

1. 賞の目的

福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動を促進することを目的とする。

2. 対 象

対象とする論文は、福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動にて作成され、平成18年1月から平成18年12月に発表されたものとする。

論文の筆頭著者は本学会会員で、論文発表時に年齢が40歳未満の者とする。

但し、福岡大学医学紀要に掲載されたものは除く。

3. 応募方法

医学部各教室、病院および筑紫病院各部門からの推薦論文を2編以内(1人1編)を目安としてとりまとめ提出する(別刷各3部を添付)。

4. 応募締切 平成19年6月11日(月)

5. 提出先 福岡大学医学会担当 大山

(福岡大学医学部内 TEL801-1011 内線3023)

6. 選考方法

- 1) 応募された論文別刷を医学会評議員に回覧して、7～8月に開催予定の評議員会において3編以内を選出する。
- 2) 選出された論文の著者は、9～10月に開催される福岡大学医学会例会の席で各15分間の講演を行う。
- 3) 各講演を聴取した後に評議員および聴衆が投票を行う。但し、評議員の1票は聴衆の5票に該当する。
- 4) 投票の結果により金賞1名以内銀賞2名以内を決定し、医学部長が受賞者の表彰を行う。
- 5) 審査の結果は福岡大学医学会ニュースにて公示する。

7. 副 賞

金賞は10万円、銀賞は5万円とする。

第54回 福岡大学医学会例会報告

日 時／平成19年3月7日(水) 17:00～18:50

場 所／医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 岩本 隆宏

I. 開会の辞 集会幹事 岩本 隆宏

II. 会長挨拶 医学部長 岩崎 宏

III. 講 演 座長……岩崎 宏

講演1 廣松 賢治(微生物・免疫学教授)

「CD1分子による生体防御：脂質を標的とした新しい免疫応答システム」

講演2 廣瀬 伸一(小児科学教授)

「ヒトと同じ遺伝子異常を持つてんかんモデル動物」

講演3 松井 敏幸(筑紫病院消化器科教授)

「炎症性腸疾患診療の進歩と福岡大学筑紫病院」

IV. 福岡大学医学紀要第33巻優秀論文賞授与式

受賞者 前川 信一(呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学)

永井 宏(精神神経科)

V. 受賞論文の要旨講演

講演1 講演者…前川 信一 座長…白日 高歩

「Pneumonectomy for Non-Small Cell Lung Cancer Impacts Survival: A Comparative Analysis of Skip Metastasis and Visceral Pleural Involvement」

講演2 講演者…永井 宏 座長…西村 良二

「若齢期における大麻成分慢性投与による情報処理障害の発現—若齢マウスを用いたPrepulse Inhibitionの検討—」

VI. 閉会の辞 集会幹事 岩本 隆宏



優秀論文賞受賞者永井氏(左から3番目)、前川氏(左から4番目)を囲んで

講座の新設および名称の変更についてのお知らせ

平成19年4月1日付けで、3講座が新たに開設、また内科学教室各科の講座名および診療科名が変更されます。詳細は下記をご覧ください。

	講座名		診療科名
	旧	新	新
基礎系	(新 設)	再生・移植医学	—
臨床系	内科学第一	腫瘍・感染症・内分泌内科学	腫瘍・血液・感染症内科 内分泌・糖尿病内科
	内科学第二	心臓・血管内科学	循環器内科
	内科学第三	消化器内科学	消化器内科
	内科学第四	腎臓・膠原病内科学	腎臓・膠原病内科
	内科学第五	神経内科学	神経内科・健康管理科
	(新 設)	呼吸器内科学	呼吸器内科
	(新 設)	形成外科学	形成外科

第33回 医学部慰霊祭

第三十三回福岡大学 医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約二五五名が参列し、平成十八年十月二十一日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十一柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた五十三柱、合わせて八十四柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、岩崎医学部長は、祭詞の中、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表すとともに「私も、日々花を供え、香をたいて八十四柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表しています。本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できま

すよう努力することをお誓い致します」と新たな誓いを披瀝されました。

